

《座談會》

出席者 (ABC順)

大学経済学部教授 赤木雅吾

香里中・高教諭 源河朝順

女子大学教授 石田章

大学文学部長 伊藤規矩治

大学文学部助教授 山路龍天

(司 会) 近藤公一

(大学経済学部教授)

同志社と外国語教育

建学精神と外国語教育

近藤 私、こういう司会にはまことに不適であると思えますけれども、よろしくお願いいたします。

まず建学の精神とか国際主義とかいわれることにつきまして、先生方お考えいただいていることからお話いただけたらと思います。

伊藤 先ず、十九世紀後半という世界史のなかでも非常に特徴的なときに、新島襄というすぐれた人物がニューイングランドへ行ったということは非常に面白いと思います。

一九六五年に行ったのだけでも、六七年には『資本論』の第一巻が出るというときで、ヨーロッパ大陸は文明時代に入っていて、宣

教的な熱意などは大分うすくなっている時代ですよね。ところが、おくれた国、アメリカでは、ミッシュナリー・スピリットというか、そういうものがまだ非常に強いときでした。新島がヨーロッパに行ったとすれば、文明の落差にびつくりしただけでも知れません。善良で、一生懸命に他人のためにいいことをしよう、ことに福音を伝えようという気

持ちの強かった新英洲に新島が行ったということは、単に同志社のためだけでなく、日本国にとって非常に大きな意味があったと思う。一口だけいえといわれれば、その点を申したいのです。

近藤 いかがでございましょう、伊藤先生のユニークな指摘がございましたが。

石田 お話の最初のテーマが国際主義というようなことでしたけれども、同志社と言うと、国際主義、そして英語、と一般的によくいわれますね。でも、ぼくは、まず国際主義というのは何だろうかと思うんですね。それと、同志社の国際主義というのはなにか伝説化しているような気がして……。戦前はたしかにそうだったと思います。非常に希少価値があった。だけど、戦後このように社会自体が開かれてきて、卑近な例をいいますと、学生だって、夏休みにどんどんヨーロッパやアメリカに一カ月ぐらい滞在してきている。もしもそれを国際化というのなら、他の一般社会あるいは他大学と比べて、いまの同志社にきわだった特色が果たしてあるのかどうか、社会の国際化に比較すればむしろ後退しているのじゃないかという気が私個人はするんで

すけれどもね。ですから、何をもって国際主義というのかを考えなきゃいけないだろうし、同志社が国際主義を伝統的にもっていて、それを伸ばしていくのなら、もっとちがった観点に立った国際主義を標榜しなければいけないのじゃないかと思います。

近藤 戦争が終わるまでの日本には一種の国粹主義みたいなものがありましたから、それに対する国際主義という、プリンシプルの上でも非常にはつきりしたものがあつた訳だけれども、百年という歴史がたつて世の中も変わり、そのなかでさらに国際主義を言うのなら、それはどういうことなのか。これはたしか赤木先生にも一言あつたと思いますけれども。

赤木 私自身も同志社の国際主義ということについては、それ程はつきりはわかりませんが、ただ、この問題を至極素朴に考えてみますと、結局のところ、日本は言うまでもなく、世界のどこの国の人たちでも自由に交わることができ、スムーズに受け入れられる様な態度、或いはその様な心の大きさではないかと思います。ですから、同志社の伝統的な国際主義ということがすぐ外国語、ことに

英語教育と結びつけられて考えられることには大いに問題がある訳で、同志社の国際主義を考える場合には、矢張り根本的な問題として、いわゆるパーソナリティの形成ということがある様に思います。そういう意味では、今、石田先生がふれられましたけれど、この際、原点にかえつて新島先生個人のパーソナリティを考え直して見ることから、この問題の解答が出てくる様に思えるのです。と言いますのは、まず新島先生が当時の国禁を破つてまで国外脱出されたこと自体、我々凡人には到底想像も出来ない様な決断力、使命感、勇氣、将来への洞察力等々の、およそ日本一国を越えた、いわば世界に通用するだけの、非常に偉大な人間の資質が備わっていたと考えられますし、それが更に、先生が最初に乗りました米商船ベルリン号の船長セーヴォリース・ハーディを始めとした色々な異国人たちに、多少の障害があつたとは言え、先生の人柄が受け入れられ、非常な好遇を受けたことは、これは簡単なことの様で、特にあの当時としては全く言語を絶する程のことであつたろうと思います。しかも、その場



赤木 雅 吾氏

合、外国語という障害は確かに大きな比重を占めてはいたでしょうけれど、しかし何よりも国境を越えた人間同志の心と心の結びつきそのものがジョセフ・ハーディー・ニーシマを生み出した根本になっていると思われるのです。そのことは、言い換えますと、新島先生のパーソナリティそのものに、あれだけ多くの米国人を魅きつけるだけのものがすでに備わっていたのではないか、それがニューイングランド、アーモストへ行かれたことによって、更に一層豊かなものに開花したのではないかと思われるのですが……。

赤木 そうですね。少なくとも私にはそう



源 河 朝 順氏

いう感じがするのですが。

近藤 もしそういうことであると、いわゆる青少年のメンタリティーが形成されていく中学・高校の段階からの問題が非常に重要になってくると思いますが、その問題と関連していかがでしょうか。

源河 中学・高校では、礼拝などで同志社の国際主義について、宗教の先生あるいは校長・教頭からときどき話があります。しかし実際に最も国際主義を標榜すべき語学教師——私も英語教師は、はたしてどの程度新島先生の原点に戻っての国際主義を理解し、現場の語学教育を通して若い生徒たちに理解させ、あるいは実践させるかということに関しては、残念ながらはつきりとした認識とか自覚がないままにただ毎日のノルマに追われ

て語学教育をやっているのではないのでしょうか。とくに一九七〇年になりましてから、香里の場合は留学生制度ができて、毎年十人近くの生徒がアメリカへ行っておりまして、それからイギリスとかカナダあたりに、国際交流プログラムなどでこれまで三人行っております。そうしますと、見返りとしてこんどはアメリカの交換学生が夏休みに一ヶ月ぐらい、あるいはまたフルブライト交換学生が一年やってくる。そういうことから、生徒たちははつきり意識しないままに、そういう国際交流を通してだんだん視野をひろげていくのではないかと思います。ただし、そういうふうな生徒のほうがどんどん先へ進んでいくのに、教員の側が置いてけぼりにされるのではないかという不安ももっております。

近藤 いま非常に大事なことを承ったように思うんですが、若い世代の生徒なり学生のほうがどんどん先行して、石田先生のお話とも関係があったと思うんですけども、そういうふうにして時代というか、歴史はどんどん動いていっている訳で、私たちの立場の間は、もうちょっと一生懸命になって勉強しないといかんという感じなんですが、山路先

生、英語以外の外国語を担当するものとして一言……。

山路 正直に申しまして、新島先生の建学精神をそれほど理解しているという自信はありませんし、いわゆる国際主義ということもよく自身にとっては今ひとつわかりにくいという気が、恥ずかしいのですけれども、しております。ただ、この問題を考えていく場合に、伊藤先生が最初におっしゃったことは非常に示唆的なことだと思っております、つまり非常にフレッシュなニュイイングランドのミッシェナリー・スピリットというか、そういうものにあの時点で接しているということ、そしてもうひとつ広く見れば、あの時点の明治の文化人、とくになんらかの教育に携わる形で事を起こした方々には、いまのぼくらが持っていないような――それはキリスト教を離れてもいいと思いますけれども、伝道というか、文化の使命観というか、そういう大きなの上に立った国際主義というものがあつたと思うのです。それはいままでの鎖国から開かれた日本をほんとうの意味で開くという非常に積極的な、ほとんど時代精神の生理的な必要からくるヴァイタリティーだと思ひ

ますけれども、そういうものがはっきりいつて逆になってこざるをえない状況にきているのじゃないか。いま源河先生がおっしゃったように、例えば高校生の段階でさえも、国際交流なんて大げさなことをいわなくて、個人の段階で外国へ行く訳です。よく自身の見聞から言ってもいまや小学生が隣り近所のおじちゃんたちと同じ団体でリュックサック背負ってパリの街をほつき歩いている訳ですよ。それをも国際交流というべきなのか、あるいは単なる旅行なのかという段階にきていて、つまり、非常に単純な言い方をすれば、日本があまり豊かになったために、外国というものもが非常に身近になってきた訳ですけれども、それが高等教育というか、大学教育の段階でどう結びつきをもつかということが、じつはほんとうの問題だと思ふのです。

じつはちょっといやな体験をパリの空港でしたのですけれども、レストランで、日本人の若い人が三、四人入って来まして、「ヘイ・ウェーター・カムオン」とやった訳です(笑)。ふつうの人間対人間のつきあいであって、みても、そういう対人的な思いやりを欠いたことばの使い方自体は非常におかしなことなん

で、国際主義とか何とかいう前に、ほんとうの意味ですべて人間は平等なんだ。

ここには、給仕さんを、何か物視したような、人間を相手にしているという意識の欠落がある気がします。大体ガイジンという言葉も、ついでに言えば、これと同じ意識あるいは意識の欠落にささえられた言葉ですし、外人とは人外のものなり、という感じの意識です。だから、一対一の人間としてお互いに気持ちよく生きていくのではないかというのが基本的なところではないかと思うのです。

たとえば京都の市電とかバスに外国人が乗ってきますね。それに対する席の譲り方、個々の対処の仕方、外国人が乗ってくるとパツと横を向く人がいるでしょう。話しかけられたくないというのはわかりますけれども(笑)、ちょっとニコツとできればすむことなんです。そういうことがいま必要な段階に日本はきていると思うのです。そのうえで、大学における外国語教育ないしは国際的な観点から見て、開かれた大学ということを考えていかなきゃならない。そこで、どういう方策を立てるか、むづかしい問題が出てくるという気がするんです。



石田 章氏

つまり、基盤になるのは、国際主義とか何とかいうよりも、個々の人間、どこの国へ行っても同じだということは、外国へ行けばわかることだとばかりは思っています。明治の、どうしても海外へ出て行って新しいもの、いいものを取ってこなければならなかった方々の次元とは、一世紀ずれているということは話の前提として認めなきゃならないという気がするんですけれども。

国際主義と国際交流

近藤 いままでの百年、それは同志社だけではないと思いますが、明治になってからの日本は、外国に学ぼうとした訳ですね。それが、なにか国粹主義なり国家主義なりのアンチテーゼみたいな形で国際主義ということが



伊藤規矩治氏

いわれて、とにかくアメリカにせよ、ヨーロッパにせよ、そこから学んで取ってくるということだった訳ですね。

それに対して、もしもここが転換点ならば外から学ぶこともだいじなんだけれども、それより以上に、われわれ自身が外に向かって主張するというか、もっと積極的に日本のものを外へ表現していく、いままでもごく少数の人しかそういうことをやっていない気がする訳で、これは日本のなかだけで考えてないで世界から日本を見る視点ということ、いわゆるアジア、アフリカの第三世界といいますが、発展途上国というのは、やはりプリンシプルとしてはナショナリズムをもって、しかも一種のインターナショナルナリズムを志向しているのだらうと思いますが、私たちも明治時代に

確立した近代日本のプリンシプルとはまたちよつとちがう段階のものを世界的なレベルで表現するという、そういう視点が学校における外国語教育の一つの問題になるのではなからうか。さきほど石田先生から国際主義とは何だらうという疑問を提出していただきましたが、それについて先生、もう少し……。

石田 いま外国のことを知ろうとするには、もちろんどこかに行くということがいけばいいでしょうけれども、必ずしもそうしなくても、テレビを見ておきますと、ほとんど毎日のように外国の映画をやっていますし、外国の風物や習慣を紹介する番組は、毎週いくつもある。ですから、断片的な知識はいくらでも持てますし、現に学生なんかと話していますと、ぼくらなんか知らないような外国の事情をよく知っていることがあるんですよ。ですから、そういう点の知識面だけで外国のことを知るという意味では、こちらから出かけて行かなくても、ある程度可能のように思います。

問題は、山路先生のおっしゃった、また伊藤先生が提案されたように、現象的なものじゃなくて、そのなかにどういうスピリット

があるのかという、その把握がいまのわれわれには欠けているのではないかという気がします。そういう点では、むしろ戦前のほうがすぐれていたんじゃないかと思えますね。

いまのわれわれは、外国の風物とか習慣とかそういう現象を追うだけで、情報が多いものですからそれに溺^{おぼ}れて、その基盤にある魂を学ばないというか、目を向けない状態にあるのじゃないかと思えます。それと、こんどは逆に、何をどうやってむこうに持って行くかということですが、これは簡単なようでなかなかむづかしい問題じゃないかと思えますね。

近藤 むづかしい問題です。伊藤先生なんかは実際にそれをおやりになっている訳ですが。

伊藤 その前に、さっき源河先生のおっしゃったことに大きな意味があると思うし、山路先生はそれを少し交通整理してくださいのですね。源河先生のお言葉に関連しますが同志社は、われわれが案外気づかないところで、国際主義のために大きな貢献をしているのではないかと思います。

たとえば私のゼミを出た人などで、英語が

しゃべれないどころか読んでもわからないようなのが、小さな企業を経営している。そういう連中がびっくりするほど国際主義を実践している。外国の青年を家につれてきて、自分の子供と同じように扱い、自分の子供といっしょに住まわせているという例が多いのです。

昔とよほど変わってきたにしても、日本の家は鍵のない家屋ですから、そのなかへ外国人を入れるというのは、アルフュース・ハーディーが東洋から来た者にどこかの部屋をあてがって、自分のほうで気がむいたときだけちよっとつれてきて、日本の様子を聞くなんてこととちがうのです。四、六時中足の裏を見られる生活をしているなかに外国人を受け入れるというのは、同志社に關係する子供やその親などが、知らず知らずのうちにそういう雰囲気をつくっているのではないかと思うのです。パーソン・ツー・パーソンというか、生活のあらゆる側面、四、六時中の体験のなかで人と人との接触がおこなわれるというところ、そういうことができるのが国際主義で、それを土台にしてはじめてほんものの語学教育も始まるのだということです。いまま

では語学といっても、要するに外国語を習うためのマテリアル（原語は材木の意）は習ってきたかもしれないけれども、完成した家を学ぶ、たとえば、イギリス文化を生きた全体として身につける用意がなかなか出来なかったと思うのですが、その点で、いままで同志社がしてきた国際主義に対する貢献というのは、さっきの新島襄とはちがう次元ですけれども、やはりあるのじゃないかというのがいまの私の感想です。

赤木 私も同じように思いますね。石田先生のおっしゃったこととちよっと反対になつて申し訳ないんですけども、現在の日本人には、いまおっしゃった外国人とのパーソン・ツー・パーソンの關係が非常に少ない様に思うのです。だから外国人が日本人を知っているのは、たとえばソニーとか日立とか言った商品としては知っていても、人間としては知らない、国すらも知らない場合がある。日本はどこにあるかと聞くと中国を指す。なぜならば、あれだけのすばらしいものをつくるのは大きい国にちがいないからだと答える。（笑）これが日本だということとびっくりしちゃう訳ですね。ギヴ・アンド・テークということ



山路 龍 天氏

でいいますと、日本人がどんどん外国へ出て行って、そこではいろいろ日本人の醜いことも出てくると思いますが、これは、どこの国の人でも多かれ少なかれ同じだと思うんです。ただ、知識をギヴ・アンド・テークするというのはかなり高い次元になりますけれども、まず最初は、われわれが外国へ出かけて行って、そういうパーソン・ツー・パーソンのコミュニケーションをすること、これが現在の日本人にとっては大切なことじゃないかと思うんですけれども。

語学教育の問題点

近藤 大きな問題なんです、国際交流なり国際主義といって私たちがここで問題にするのは、学校教育の一環における外国語教育

というところへ絞っていきたいと思います。同志社は、中学・高校・大学、しかも幾つかの学校がある訳ですけれども、外国語教育としては、いさおう制度的には英語が中心になり、幾つかの第二外国語が大学で課せられているという姿です。いまいろいろお話がありましたように、伝統的に日本の外国語教育がすべてそうであったように、まず読むことと書くことから出発して、日本語という特殊な言語の状況からして依然としてそこにウエイトがある。むこうですと、まずしゃべるほうが先で、それから読み書きということになる。

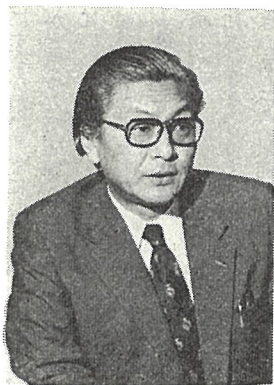
その辺いかがなものでしょうか、学校教育における外国語ですね、しゃべるのができないといかと言われてからかなりです、いや、学校では学問するための語学なんだから、読み書きがだいじだといわれて、いろいろある訳ですが、近ごろ中・高あたりではどんなことが話題に……。

源河 さっきも先生方から指摘されたんですけれども、同志社といえば英語ということ、がたしかに戦前はあったかも知れません。しかし、もうそれは神話化、あるいは空洞化したんじゃないかと思われるほど英語教育の面

ではいろんな問題ができていっていると思うんです。実際に中学校・高等学校の現場でどういう点が問題になっているか、それを簡単に説明してみたいと思います。

たしかに同志社というところは、入学してしましますと、入試がありませんから、ある意味では、伊藤先生のおっしゃったこととちがった意味で、いわゆる語学教育ができる理想的な場であることは、かわりないと思うのです。同志社中学などでは、たしか、上智が出している教材を使っておりますけれども、他の中・高では文部省のきめた教科書を使っております。ところが文部省では、三年ごとに部分的改訂をしたり、教科書をかえ、近くまた大幅にこれをかえるようです。私も現場では、教科書は使ってもあくまでも主体は教師であるといながら、現実には教科書にふりまわされて、どなたかが指摘されたように、教師が教えるのじゃなくて教科書が教えるというのが、残念ながら同志社としても当たる面があるのじゃないかと思うのです。

それで、私どもはその問題をとり上げました。ことばの終局目的が自国の文化を通して外国の文化なりを理解することである



近藤 公一氏

ば、さっきの国際交流、国際主義ということ
が大きな前提であるとすれば、語学というも
のをコミュニケーションの手段として考えな
きゃならないということ、香里では独自の
教科書をつくってみようということになった
のです。その場合、文部省の指導要領をまる
つきり無視する訳にはいきませんから、これ
を前提として、どういう語学教育をしなけれ
ばならないのか、そのためにはどういう指導
法があるのか、その指導法を実践するために
はどういう教材・テキストでなければならな
いのか、ということから絞っていきまして、
去年、実験的にそれをつくって実際に使っ
てみたのです。徹底した音声教育を通してのク
エッション・アンサーによるドリルを行いま
す。まず聞かせよう、聞いたものは言わせよ

う、言えたものは読めるようにしよう、読め
るようになったものは書けるようにしよう、
単純に申しますと、そういうことで指導をや
っている訳なんです。

近藤 いま先生がいわれるように、同志社
としては中学・高校・大学というふうに一貫
教育の理想的なものが実現したら、非常に恵
まれた姿であるはずなんです、大学で受け
入れられて、先生方のご意見は……。

赤木 このことについては前に申したこと
があるのですけれども、一貫教育とは言いな
がら、現実には英語を例にとってみると、
中・高の先生と大学の先生との間になんらコ
ミュニケーションらしいものがない。これ
では表向きには一貫教育といってみても、実際
は欠陥教育になっている訳ですから、英語の
先生でもほかの教科でも同じだと思いますけ
れども、一堂に集まって、一貫教育という以
上は、つねにコミュニケーションを絶やさな
いようにするということが必要なことではな
いかと思います。

近藤 途中ですが、同志社の中・高から大
学へ入ってきた人と、外からふつうに試験を
受けて入ってきた人となにか違いが出てきま

すか。

赤木 これにはいろんな問題があります
が、たとえば、一年生の、非常にフレッシュな、
希望に満ちあふれた気持ちで入ってきている
クラスなどへ行きますと、どの程度学内高校
出身の生徒がそのクラスにいるかということ
で、そのクラスの良い悪いといえますが、教
えやすいか教えにくいのかの判断が大体出来る
様に思います。しかし、これも前期はそうで
あったも、後期になりますと、また変わっ
ちやうこともよくあるのです。そんなことで、
いわゆるメリットもディメリットもそう簡単
にはいえないと思うのです。ただ、へたをし
ますと、まじめに試験を受けて外部からきた
学生が学内高校出身の学生を見て、これが同
志社なのかということに幻滅を感じちゃう。

その結果勉強しなくなる。だから、試験の結
果からだけで見ますと、案外学内高校出身者
の方が良いんですね。そして学外から来た学
生の方が、あれだけの難関を突破しておりな
がら悪い場合もかなりある訳です。そこでよ
く聞いてみると、どうもそういう理由で同志
社に幻滅を感じたということをやいちゃい
聞くことがある訳です。そこらの問題をいか

にするかが、非常にむずかしいことではないかと思うんですね。ですから一貫教育と一概にいいまでも、そこらの点もむずかしい問題ではないかと思えます。

源河 じつは私もでも新しく自主教材を作成してやろうとした大きな動機の一つはそこにあります。うちは中・高六年一貫教育でございまして、以前は香里中学出身の生徒三クラスに対してよそから——ほとんどは公立中学から来るのですが——四クラスぐらい入ってきていたんです。毎年新高一になりますと一斉標準テストというものをを行います。私はたまたまそのとき高一をもっておりましたがそのテストの結果は非常に惨憺たるものでした。うちの中学を卒業した者の平均が四〇点、他校から来た者が八〇点、そのギャップがあまりにも大きかった訳です。これはそのあと本校にあります研究活動委員会できり上げました。こうした現状をわれわれはだいたい知ってはいたのですけれども、あまりタッチしたくないという妙な雰囲気がありました。それで、これをあえてさらけ出そうというので発表致しましたところ、そのときに英語科のみならずうちの学校でいけばん問題

になった点は、これはたして生徒に問題があるのかということ。六年あるいは十年一貫教育で、推薦制度に甘えて、一ぺん入ってしまったらエスカレートで、無難なくやれば卒業できるという、そういうものに對する生徒の甘えであるのか。教える側にも同じような責任があるのではないか。とくに中・高レベルでは指導法というものが非常にだいいではないのか。私もどが生徒には推薦制度に甘えるなという一方、教師側も制度に甘えて、なら新しいことをやろうとしないで、文部省から来るテキストを、時間数の多いのをいかににゆつくりこなし、それですましていたんじゃないか。そういうことから、まず教師側の襟を正そうということが大きな問題だったのです。大学の教養英語の先生方の中には、香里出身は何人いるかと手を挙げさせる方がおられると聞いております。しなくなるお気持ちちはよくわかるんですけれども、そうしますと、香里出身のものはますます萎縮してしまいます。これは語学以前の問題で、教育的に生徒のモチベーションをそぐこと甚だしいと、一度抗議申し上げたことがあったんです。ただし、最近、学内中学の卒業生

と他校から来たものの差は、中学校が非常に入りにくくなったということもあり、質そのものが非常に向上しましたのと、他校から入ってきたものの質がやや平均化されて落ちまして、いまのところはだいたいトントンで、むしろうちの中学校から行ったものが、こういう教育をした成果もあると思うんですけれども、かなりトップの群を占めている。そういう連中が、英語が好きになって、子供ですから、単純に外国へ行つて来たいということで、留学生制度を利用して、毎年何名か行くようになっていきます。

中・高間でもそういう関係ですし、中学、高等学校、大学の一つの大きな連絡機関なるものを私もは、十年前から要望しています。が、いっこうにそれが実現しない状態なんです。大学もそうなんですけれども、中・高、たとえば女子中・高、あるいは中学校で、なんとという先生方がどういふうな英語の授業をやっているのか私どもにはさっぱりわかりません。一例を申し上げますと、組合主宰の教研活動の一つとして去年私は女子中学校で発表を致しました。出席者がなんと八人。そのうち六人が香里の同僚で、ほか

から来た人はたった二人なんです。助言者として大学の教養の英語の先生が来られただけです。私も非常にりきって行ったのですけれども、実情がそういうことでは、一貫教育はおろか、こういう恵まれた環境を生かした教育はともおぼつかないと思います。

近藤 中学とか岩倉とかは、いま先生のおっしゃるようなことは……。

源河 全然ないのです。ですから、やはり大学を中心とするそういう大きな機関ができるといいと思います。その前にやはり中・高レベルでどういう問題があるのか、それを出し合って話し合おうとしても、なかなかその機運に至りません。私も新しい教材をつくりまして来年三年めになります。テキストが一冊三〇〇ページで、これがBOOK I・IIとできておりまして、BOOK IIIがだいたい原稿ができて印刷にまわす段階です。それができた時点で、研究会なるものを設けて、香里では実際にこういう実験をやっているんだということを他の中、高および大学の教養の先生方に、つぶさに見てもらいたい。そういうものを発展させていけば、みなが集まる共通の場をつくっていけるようになると思

います。大学にはアメリカ研究所とかいろんな研究所がありますけれども、早稲田、慶応その他有名な大学には語学研究所というものがありませんね。同志社でもせっかく一割が学内推薦で入学するんですから、中・高・大を通じて語学教育の生きた実践場がある訳なんです。そこでそういうものを利用して、大学を中心としたそういう教材研究なり、あるいは指導の研究なりをして、実際にプラクティスの面で中・高レベルで研究実践する、それをさらにまた大学へ持って帰って研究する、そういう機関ができると、現場の教師ももっとはりきってやろうと思うのです。

近藤 (笑)。国際交流以前に同志社内交流ですね

赤木 そうなんです。学生のほうがむしろどんどん交流をやっていて、教員のほうはどういう訳か閉鎖的という状況ですね。

石田 まったく同感ですね。女子大の場合ですとすぐお隣りでしょう。年に二、三回でも関係者が集まって、何らかの話し合いをもたなければいけないということなんです、いまだに実現しませんね。

いま一貫教育の問題にふれられましたけれ

ども、女子大のほうにももちろん推薦制度がありますので、社内校から入学してきます。下から来る学生は、概してのびやかで、人柄もいいですね。ただ、学力という点では、もひとつという気がします。もちろん四年間の間には、伸びる人はぐんと伸びる。ただ、その伸びる人の率がどうも少ない。どうしてなのかと思うんですけども、やはり一つには他学生にはよかれ、悪しかれ、入学試験という難関を突破したんだという自信が一方にはあるでしょうし、それを越えないものですから、かえってそれがコンプレックスを生むような形になって、萎縮させているんじゃないかという気がしますね。ほんとうはおかしいことなんですけれどもね。

外国語学習のモチベーション

近藤 いろいろ具体的なお話を伺っていてたいへんなことだと思っんですけども、語学を学ぼうとする者の原動力ですね、この外国語を学ばないといまおれのやりたいことができないという外側からのノートヴェンディツヒカイト(必然)か、あるいはどうしたってやりたいというライデンシャフト(情熱)

か、そのどちらかがないと原動力にならないでしょう。それがないままに、制度とかテクニクとかでいくらワァワァ言ってもなかなかです。ね。だんだん学校の制度が大きくなっていけばいくほどそうだし、内面的な原動力ぬきでそういうレールに乗せよう、あるいは乗ろうとするので、無理が出てきているのじゃないか、そういう外国語教育の、文字どおり語学以前というものです。それは教育としては何かほかに考え方がないのでしょかね。

山路 大抵の場合、外国語会話の授業は、必要ないと思えます。極論ですけれども。モチヴェーションの問題と重なってくる訳ですけれども、じっさい日本で、文部省の指導要綱なんかに出てくる、つまり外国人と対等につき合うとか、あるいは商社マンとしてむこうでちゃんとした英語なりフランス語なりで商売できる段階というのは、非常にプラクティカルな意味ではいいことだと思えますが、それにはそれだけの研鑽を積みまかならんと思えます。少なくとも語学というものは大学教育のなかでどういうふう位置づけられるかということを考えてみれば、とり

わけ第二外国語を担当しておりますとつくづく思うんですけれども、はっきり言って、自己教育の問題だと思えますね。

つまりは、外国語を学ぶということは、その裏でほとんど暗黙裡に了解されていることだと思えますけれども、日本語を学ぶことだとさえ思っているのです。ぼくはたいいてい新学年の開口一番、きみらにフランス語がしゃべれるとか、そういう教育をするつもりは全然ないんだと言っています。しゃべろうと思えば、必要に迫られたら、たいいていの人はある程度までしゃべれると思えます。ヘリコプターでボツとバリなんかへつれて行けば、のどがかわくし、水がほしいしということ、まわりを見ていて「カフェ」と言わなければ仕方がなくなってくるとまで言うんですけれども、そういう極端な例を持ち出さなくても、外国語教育そのものの必然性ということからいえば、本を読んでいく段階——、それまでに文法とかいろいろなこと、ある程度の年限と覚え込みとかいうか、そういうことは必要でしょうけれども、そこからもう少し踏み込んだ段階では、解読していく喜び、それを日本語に移していくときに、およそ英語の文章な

りフランス語の文章がそのまま直訳というか単純な形で単語対単語の一对一対応で日本語になる訳がないということを、勉強すればするほど身にしみてわかってくる訳です。そのことが非常に重要なことであって、システムが違い、言語構造が違うということは、どれほど大きな意味をもつかということ、これはほかの学問にも適用できることだと思いますけれども、一種の非常に無理なシミュレーションをしよっちゅう強いられることによって、はじめて問題の意識化を迫られるという、一種の絶えざる自己陶冶、本当の意味での学問(ラーニング)だと思ふのです。こんな過程を通じて、ああ、こういうことかという段階が、自分自身のフランス語を学んできた道をふりかえって何度かあつたと思ふんです。それを通過することは非常に重要なことであって、大学で何々学と名のつく専門の学問というのは、たしかに知識を受け取るというか、自分のほうに新しいものを受け取るという形で存在している訳ですけれども、外国語の勉強においては、教師はほとんど何も与えることができないのではないかと思うくらいです。ソクラテスが言ったように、産婆術

というか、子供の本来もっている能力で一人立ちをするのを手助けしてやるしかないと思うんですけれども、本人のなかでのモチベーションを引き出す教材なり何なりを考えていくのがこっちのおもなる役目で、簡単に、外国語を話せないから日本における外国語教育はなっていないという議論の立て方は、たいへんな誤りでないかとさえ思える訳です。

伊藤 ひじょうにおもしろいご議論で、結論的には似たことになると思うけれども、あなたの耳に入りやすいほうからいえば、たとえば私の身近なものがこんどOEC Dに行きました。ばく大な月給をもらっている人だけでも、朝九時から午後一時まで何とかいうフランス語の学校にやってもらっているの、役所へ行くのは午後一時すぎから夕方まででしょう。だから、実際に役に立つフランス語というものはこっちでやっていなくていい訳で、あなたがおっしゃったような意味での勉強が前提にあれば、あとの必要なことは、現場の半年かそこのトレーニングでできる。ことにヨーロッパ語の場合はそうです。それであなたを安心させておいてから言うんだけれども……。

山路 ぼくのは、もちろん、極論ですから……。

伊藤 というのは、語学というものには少なくとも二つの側面があると思うのです。一つは、山路さんが強調したような文化。文化とことばというのは、密着していて、離せない。だから、語学と文化と離れた形で教えたってしようがないということがあなたの主張だと思う。だけど、もう一つは、なぜ言語的に語学の教育を扱おうとしないのだろうか。

ぼくは一度びっくりしたことがある。あるカトリックの婦人に三日ほど香港を案内していただいた時のことです。彼女はドイツ人で学位を持ったゲルマニストです。ところが、場所が香港だから、私とはドイツ語で話しているけれども、至る所で英語を使わなきゃならないでしょう。それがとてもうまいんですよ。きれいな英語を使うね、といってはめると、本気になって恥ずかしがる。英語がへたで困るのだということです。わたしよりうまいじゃないかという、自分はゲルマニストですから、とひらきなおるのです。ゲルマニストである自分が英語をしゃべれないという

ことは、申し訳ないのだという発想です。ドイツ人ですから、ゲルマニストであれば国語の専門家ということです。国語国文学の教師をする立場にある自分が英語やフランス語が自由でないなどということは、恥辱だということです。これが日本人たちとちがうのではないのでしょうか。発音だとか、しゃべれるかなんてことは、これは大学でやることではなく、専門家になる以前の条件なのです。その意味で、山路さんとぼくとは意見が一致します。

ここで第二語学についてというのが出てきたから、ちょっと言わしていただくけれどもたとえば京都大学の教養の学生たちの最大の不満は語学だといいます。なんでそうかという、片っぱしから非常勤講師がやっているといえます。非常勤講師だつてりっぱな人がいると思うけれども、学生たちは先生として認めてないんですね。だからばかにしちゃって、かえって、自分がだめになっちゃいます。同志社だって同じことがあるとすれば、やはり大学での語学研究というのは、山路先生がおっしゃったようなことをするべきで、そしてそれに限るべきだという気がします。その

ための前提として必要な準備のためには、別にインスティテュートというようなものをつくるべきだと思うのです。京都にもそういうインスティテュートを二つ三つつくっておいで、そこを出たのを近藤先生なり山路先生なりがテストをして資格を与え、あとは山路先生がおっしゃったような教育にかかる。そういうふうにすれば、やたらに非常勤講師、場合によると無責任な非常勤講師をたくさん雇って、それで学生も満足しないというような雰囲気をなんとか克服できるのじゃないか。おなじことは、また国語についてもいえるでしょう。国語・国文学はあなた方と同じレベルでやったらいいかもしれないけれども、一方では、やはりさつきおっしゃったように、音声によるコミュニケーションのメディアの一つなんだ。その教育は、大学とは別のところでやるべきだという点で、コンセンサスを得たいとばかりは思います。

近藤 石田先生はこのあと会議がありますので、これだけはぜひ、ということがありましたら……。

石田 ばくはあまり高望みはしないんです。いまの私立大学では学生数の問題が基本的にあると思いますね。女子大は比較的小規模だといわれますけれども、それでも英文科だけとりますと、いま一学年平均四一〇名ほどおりますから、ほんとうは大変な学生数なんです。語学の授業というのは、やはり小人数であることが第一条件でしょう。ましてやドリルを伴うものは四〇人、五〇人を相手にしても、これはやはり表面的なものになってしまいます。ですから、少なくともいまの同志社の現状のなかで語学教育というのは、理想を考えればきりが無いと思いますけれども、現状をふまえて考えれば、物理的な限度があると思うんです。

それと、もうひとつは、カリキュラムの問題があります。一年生に、どういう目的で英文科に入ってきたかと問いますと、半数ぐらいの学生は、自由に英語をしゃべるようになるたいからというのです。ところがわれわれのはうは、一応英文学を教える。もちろん、

読み、書き、しゃべるといのが理想でしょうけれども、教室で重点が置かれるのは、やはり正しく読んで正しく書くというのが第一義になりますね。そうすると、学生の持っている欲求と、われわれが個人的にも、またカリキュラムで与えているものとのギャップは、少なくとも当初は非常にあります。その辺のギャップをどう埋めるか、どう近づけるかというのが一つの課題だろうと思いますし、仮に近づけたとしても、現実的な壁というものが大きくあって、どこまでカリキュラムを実際の現場で完全に運用できるかというと、いささか絶望的にならざるをえないですね。ですから、将来の理想ということになりますと、あまりいい知恵はないんです。要するにもっと小さいクラスにする。

それからもうひとつ、学生にやる気をおこさせるというのには、いろいろな方法があると思います。たとえば同じ作品を読むにしても、講義の仕方もあるでしょうし、またどんな作品を選ぶかにもよると思います。

そういう、何か学生にやる気を起こさせるようなものを、カリキュラムの問題とは別にわれわれ個人がもたないと、うまく行かない

という気がしますね。

じつは、近藤先生はお芝居の専門家でいらっしゃるんですが、女子大では英文科の四年生が毎年シェイクスピアを原語でやっているんです。シェイクスピアを原語で日本人がやるのですから、まあ、とんでもない話なんですけれども、じつさいやっている学生は非常に熱中しています。いま六〇名ほどがやっていますが、とにかく対象が芝居ということでは——芝居というのはいかにのめり込んでしまふところがありますから。とにかく学生は夢中になりますね。そういう稽古の過程のなかで、当然外人の先生の発音指導とか受けまね。またスタッフの連中は、辞引を引きながら、エリザベス朝当時の劇場とか衣装とか小道具の研究をやる。それからシェイクスピアの原語を通じて現代の英語との比較が当然なされる。いちばんいいのは身振りをまじえて台詞をしゃべるとのことです。やはり同じ語学の勉強でも、実際にからだを動かしてやるということは非常に効果的だという気がします。五月頃から本読みを始めますが、その頃といまと比べますと、発音など格段によくなっていますし、それと六〇人なら六〇人の

学生が一つになって何かをやるという、そういう要素も噛んで、教育的効果もかなりあります。

いま申ししたのは、特殊な教科ですから、余り参考にはならないかも知れませんが、いづれにしても、私は、学生の一人一人が、語学をやる以前にある各自の目的意識、自分は何を本当にやりたいのかという自覚がないと、語学習得も、結局はから振りに終わるのではないか、そんなふうに思います。

近藤 女子大のそのシェイクスピア劇のことで、ぜひお聞きしたいと思ってました。芝居の三大要素というのは、言語の感覚と、身振りの感覚と、もう一つ、場所の感覚ないし状況の感覚。それがないと、芝居というのは見るのもやるのもおもしろくないんですね。石田先生のお話で、言語教育ということにも身振りの話が出ましたが、やはり言語が言語で抽象的に自立するはずがない。対象なり状況なりがあって言語が意味をもつ。だから、じつはばくの場合、なぜドイツ語をやりだしたかということ、つまり芝居の勉強がしたくてやりだしたようなもので、たまたまこれは芝居なんですが、たぶん、言語そのものによせる

関心にプラスする何かがあって、やはり生きたものとして勉強する動機になるのだろうなと思うのです。

山路 石田先生のお話を聞いて思い出したんですけれども、高校三年のときにローレンス・オリヴィエの『リチャード三世』というのが来て、そのときシェイクスピアの英語なんてどうい読めるはずがないんですけれども、研究社のテキストか何かを買ってきまして、映画館に朝いちばん初めから夜まで一日入っていて、懐中電灯で照らし合わせながら、リチャード三世の最初の独白の部分を覚えてたことがあるんです。ローレンス・オリヴィエがやっているし、カッコいいというくらいのことなんですけれども、そういうことで、個人個人のなかでそういう思い出というのは、ほんとうの意味で何かの飛び板としてあったと思うんです。それを引き出してやるのがまさに産婆役としての教師の役目だろうと思うんです。だから、いま石田先生がおっしゃったように、何か興味をもっていて、みんなができるようなテキストというものを考えるのですけれども、なかなかそうはいかない。それと、はつきりいつて語学に関して

は、人数の制約というのはやはり最大の要素だろうと思いますね。それと、もう少しカリキュラムの上での時間の余裕がほしい。文部省の単位制で何単位でいくということだけでは、ほんとうの意味の十全な語学教育はできないという気がつねにする訳です。だから、話すこと、聞くことは切り捨てざるを得ず、外国語から離れた場合でも何か残るものがあるのじゃないか、そういう立場から言ったのですけれども。

(ここで石田氏退席)

伊藤 ぼくはその切り捨てることもしようがあるまいという点には賛成だけど、その前提に、教室で切り捨てられる部分は、別に生活のなかのどこかになきゃならない。

山路 それこそ日本の全体の問題であると思いますけれども、たとえば京都とか大都市のまんなかには必ず語学のセンターというか、そういうものがほしい。京都はその意味ではまだ恵まれているほうだと思います。日仏会館もありますし……。

伊藤 いまローレンス・オリヴィエのことをおっしゃったけれども、たとえばシェークスピアの文章の中身を日本語にしてみても、シェークスピアがわかったことにはならない

とぼくは思うのね。

山路 リズムをとらえないことにはことばの意味がわからないですよ。

伊藤 オリヴィエのモノローグなんかを聞いている感覚ね、感情が高揚してくる。それが少なくとも要素に加わらないで英文学というものはないだろうと思う。それがわからないで、シェークスピアがわかるということとは思議だと思う。むしろ、近藤先生なんかどうお考えか教えてほしいけれども、たとえば、どなたでも知っている例のゲーテの『魔王』にしても、シューベルトの曲があるでしょう。あれは詩としてどうなのか、ぼくはべつにどうということはないと思っているんだけれども、しかし、昔、ぼくたちの子供のときだったら、シューマン・ハインクがいわゆるNocturneを積み重ねて、秋の夜の峠道に枯葉のすれる音とか、そういう雰囲気を出して歌ったら、やはりたいしたものだと思うざるをえなかった。だから、意味をいくら日本語にしたってちっとも感心しないけれども、しかしまともなドイツ人がまともにあれを読めば、それは美しいですよ。

赤木 それと関連があると思うのですが、

私が英国に居りました時に、日本の英語教育をいっただう考えるかということで、ケンブリッジのドクター・ブリュワーという先生と話し合ったことがありました。実はこの先生はいまから十八年前にI・C・Uにおられまして、日本のことはよくご存じなんです。その時の議論の中心はスピーキングができないいまの日本の英語教育はまちがっているのではないか、ということでした。その時ドクター・ブリュワーは、あれでいいんだ、とおっしゃる。スピーキングというものは生活のなかで学ぶものだから、もしスピーキングをやりましたかったら、一ヶ月ほど英国に来て生活したらいい。それより大切なのは内容であって、何をしゃべるかが問題なのだから、特別に日本の英語教育がまちがっているとは思わないというお話しで、私自身も、なるほどと思ったものでした。

それから、学生のインタレストの問題なんですけれども、これはかなりむづかしい問題だと思っんです。場現でわれわれがやっていまして、どのように意欲を出させるか、ただ単に読んで、訳して、さようなら、ではだめだと思っ訳です。ですから、ただ、こうい

う場合にはこういうふうに訳すんですよ式にやったのでは、私自身の経験からしても、先生自体が、ある意味では興味をもっていない訳ですから、まして学生に興味をもてというのは無理だと思うんです。(笑)

伊藤 正直すぎる。(笑)

赤木 実は、私は中学も高校も教えてきましたので、ざっくばらんに楽屋裏のお話をしますと、高校なんかの場合だったら、ちゃんと教師用の「虎の巻」がある訳です。それを授業の時間の前に見ておいてサッと行っちゃう訳です。それで済ましてしまうという状況を見てきましたので、余計そう感じるのかも知れませんが、教師自身がほんとうに英語が好きなのか、英文学が好きなのかということが必ず根本にあると思うんです。そしてやはり常に反省しなければならない。去年の自分より今年の自分はまた新しい教師として再出発するのだという、反省と熱意が必要なのではないかと思えます。それからテキストの選択にしても、ただカタログが来たからタイトルだけ見て、これはいいでしょうと安易に決定することは非常に危険だろうと思えますし、又学生にとってもえらい迷惑なことだろうと

思うんです。

それからこれはあとで話題になってくると思いますけれども、やはり在外研究というようなことについても、少なくとも語学の教師は、半ば強制的というところと語弊があるかも知れませんが、要するに外国へ行って、外国で生活していることを最低の条件とするぐらいの制度的配慮があっても良いのではないかと思います。

オーラルメソッド是否

近藤 たしかに読み書きとしゃべるということですね、どうしてもエントヴェーダー・オーダー式な議論になりがちだけれども、どっちに重点を置くかの問題ですね。結局、言語は一体のものですよね。まず音声から出て文字になってという、これは元来どなたもお認めになる。学校教育というさまざまな制約があり、かつまた日本語という、世界に冠たる孤立した言語の位置ということもあったりして、では、学校教育ではどこを辛抱するか、人によって辛抱するところがちがう。しかし、それはたぶん学ぶ側のインテレストの問題でもある訳でしょう。ですから、それをど

う考えるかということにもなると思うし、又、赤木さんがおっしゃったことですが、一昔前の旧制高校の語学教師というのは、任官すると同時に一年や二年はやらされて、それから教えるみたいないことがあったんですね。

源河 いまの山路先生のご発言は、大学のレベルでは確かにそうで、先生のいわれる真意はそういうことだと思います。しかし、誤解されるむきもあるかと思いますが、実際に私どもが中・高で教える場合に、そういう問題をどういうふうに扱うのか述べてみたいと思います。

中・高レベルですらも、どっちみちいくらやっただって向こうの幼稚園児より英語がうまくなるわけじゃなし、それにたかが一年に二〇〇時間くらいしかやらない訳ですね。二〇〇時間で英語が聞けたりしゃべれたり、四つの機能がまんべんなくできるといふ、そんなことは初めからできっこない。したがってわれわれとしたり、外国文化の吸収のために読んだり、できれば少くく書いてみるようにすべきだという意見もある訳なんです。たしかにそういう面もありますが、私どもがオーラル・アプローチを主張している場合に、これ

を母国人並みにしゃべってみようということではないのです。それからいま山路先生のおっしゃられた真意がたえず逆用されて、どっちも内容のないことをベラベラしゃべったってしょうがないじゃないか、それからもう一つは、英会話なんていったって、グッド・モーニングかハウ・アー・ユーくらいのことろでお茶を濁すにきまっているというので、現に私どもが授業をやっているのを見に来られた方は、おたくでは会話の授業をやるんですかと言うのです。私どもは英語の勉強ですから、日本語をセーヴして、英語そのものを教えようという考え方なんです。普通第二外国語といっておりますけれども、私はこのことばにたえず抵抗があるんです。世界には何千あるか知りませんが、そのなかの一つであって、言語というのは同一平面上において、この言語、あの言語というべきであって、これを第一外国語、第二外国語といいますが、なにか第一外国語が上等で、第二外国語は二の次というようなことになる訳です。

もう一つは、やはりよその国のことを習うのに音声から入るほうが、結局は、読む、書く、へ移行する場合にいい。英語教育は言

語教育ですから、音声は完全に無視することではないといながら、それを無視し、訳読から説明、文法、解説という方向に進みがちです。生徒の側からしたら、たえず受身の形でしかことばを受け取ろうとしない。まさに伊藤先生がおっしゃったように言語を生活の場で使うというようなことはおよそほど遠くなって、いわゆる文法や何かでギューギーいじめられて、ますます英語そのものが嫌いになっていくという訳ですね。それがさきほど赤木先生その他から問題になったモチヴェーション、動機づけにつながる訳なんです。このごろ生徒はみな英語に対する好奇心が強いですから、習ったらずいしゃべれるような気で入ってきます。ところが、しばらくやってみると、そうじゃないということがわかってきて、とたんに諦めるのが早くなりまして、それからイヤになる。イヤになるところか嫌悪症になって受けつけないということがあります。生徒が習ったものをたえず何らかの形で、生活の場というほどのことでなくとも、それが使えるものだ、生きているものだという意識を持ちつづけられなかったら、生徒はなかなか受けつけない訳ですね。そう

いう意味でも、いままで全然知らなかった外国語を使って、なにか意思の流通が非常にベシッくなレベルでもできるということ、そういうことから生徒の集中力の幅を伸ばそう、それをさらにその子らのモチヴェーションにまで発展さしていこうということなんです。

伊藤 山路さんとぼくはどこまでも意見が一致するんだけど、いまおっしゃった音声とか、ことにいわゆる発音の問題は、これまた国語の問題につながりますね。国語の世界でも、このごろはますますラジオとか、テレビだとか、電話だとかいうものが普及しているので、直接音声でコミュニケーションを行う必要がふえています。日常語を耳で聞きわけようとする外国人もふえています。それなのに日本人は日本語の発音に無関心ですね。それどころか、頭の中では漢字で考えて、言葉は本来音声だということを忘れていきます。固有名詞でもなんでも平気で変えちゃう。数字をわかりやすくいうためにシをヨ、ンと読みかえたり、シチをナナと読みかえることは許されるとしても、しかし七条通はどこまでもシチ条通でしょう。ところが、市バ

スであろうが市電であろうが、あらゆる場合にこのごろナナ条といえますよ。ひどいのは四条を、ン条なんていいますからね。ところが、国際文化観光都市には、ちゃんとローマ字の街路名が書いてあるのだから、ひとさまを迷わせるのです。

それからもう一つ、たとえば語学教育といったって、おっしゃるようにカルチュアとラゲージというのは一つになっていて、いわゆるバイリンガルという場合、バイカルチュラルといってもいいようなことで、英語の世界でものを考えたり、しゃべったりしているときは、おっしゃるところの英語のシステムで考え、しゃべり、読み、書きしている訳ですね。日本語の場合は日本語の構造でやっている。そういうようなやり方で勉強する場合だっていくらかあるのだから、そのことに對して教師はもう少し寛容になる必要がある。学内の中・高から来た人は英語の成績が悪いとか何とかいって、案外その人たちがこんどは大人になってアメリカへ行ったり、イギリスへ行ったりしたときに……。

山路 その芽は育まれていると思いますよ。

伊藤 サツとそのなかに入っていくということがあるでしょう。そういう種類のことをやはり大切にしていくという主張をしないとね。そしてそれを言語学的にあとで統一する能力を育てるのですね。このあいだ、ぼくはドイツ人の講演を聞いていて、そのなかで、ソビエトの侵攻政策をおやめるのに Absence-kung という言葉ができました。おどかしやめさせるというのでしょうけれども、講演者は、このドイツ語より *Ubsessation* というフランス語を使ったほうがいいのです。その意味は骨を抜くとか、この場合なら牙を抜くということでしょうから、これはドイツ語よりフランス語の方にもっと適切な言葉があるということになります。これは、ドイツ文化とフランス文化の微妙なちがいを示していると思うのです。

大卒卒業者レベルだったらそれが理解できる程度なのですが、外国語教育の目標にされないといけないのではないのでしょうか。

源河 さきほど赤木先生が、教師は自分の教科に対して情熱をもつべきであるとおっしゃいましたが、たしかに大学でしたら研究者という一種の自尊もありでしょうし、一生

の仕事なんです。ところが、中・高レベルではご承知のように独立採算ですので、いろいろ雑務がふりかかってくる。組合の仕事に選ばれたら、一年棒に振りますし、それから主任だとか副主任だとか委員だとかに選ばれますと、そういうもののほうが優先して、教科主任の仕事は単なる走り使いみたいなものです。英語専任教員が十二人おりますが、この人たちを集めて何かやろうということになりますと、なかなか時間が取れない。そういうこともあります。

それからもう一つは、さきほど、語学教師である以上は——英語の場合は英語をしゃべる国へぜひ行くべきであるということでしたが、以前はフルブライトとかイースト・ウエストというような制度がありまして、うちの学校でも、少数ながらそういうものに応募して、苦心惨憺して行ってきた。ところが、最近は同志社の給料もやや上がってまして、ポーンスをためれば行けるくらいのことはあるらしいです。それも観光旅行みたいなもので、行くかぎりは最低一年、あるいは実際にそこで生活してみても、英語というものとその周囲の文化というものを身にしてみてもなければ、

帰って来てから自分の英語の教育に生かされ
ないと思うのです。私事で恐縮なんですけれ
ども、同志社で学びましたが、語学教育なん
てものはナンセンスであると思っていたんで
す。というのは、英語ができればだれでも教
えられるので、ことさらフリーズだの何だの
言う必要はないというのが私の考えでした。

フルブライトで行ってきたして、ガラッと変
わったのです。帰ってきてからほんとに恥ず
かしくなりまして、それが一種の動機づけに
なりました。これはやはりやり直さなきゃな
らんということになったのです。そういうの
が一人二人おりますと、職場の雰囲気が変わ
ってきますね。しかし、やはりこれとても人
数が限られておりますし、だれも彼もと行け
ないのです。大学の場合は研究員として行か
れるチャンスが非常に多いのでしようが、全
体として中・高の場合は、こういうのは行く
必要はないという雰囲気なんです。

近藤

在外研究の制度はないのですか？

源河 一切ないのです。ですから、公募さ
れているものに応募して、それに運よく受か
れば、それで行くということなんですけれど
も、最近フルブライトの教員プログラムは

なくなりましたし、イースト・ウエ
ストの教員プログラムもなくなりましたので、自費で
行くより仕方がない。自費で行くとなると、
二、三百万円覚悟しなければなりませんし、
ちょっとやそつとではだめですね。ある私立
では、毎年、あるいは二年に一度くらいは英
語教員を外国に一年なり留学させる制度もあ
ると聞いております。そういうようなものを
しないと、語学教師が自信をもって自分の教
科に打ち込めないでしょう。

近藤

同志社のことだから当然在外研究員
の制度があると思っていた。これはぜひと
も……。

伊藤

いまは過渡期だから、先生のおし
やるようなことをしなきゃならんと思いま
すけれども、大学の語学教育の国際的な水準で
考えますと、皆さんご存じのサセックス大学
にはエアリア・スタディーというコースがあ
ります。イギリスの大学のB・A・はアメリ
カや日本とちがって三年で出す訳です。とこ
ろが、エアリア・スタディーの人たちだけは
四年コースになっている。四年たたないと
A・B・はもらえない訳です。それは、ジュ
ニアのときに専攻のエアリアの言葉が母国語

としておこなわれているところに行って、一
年間生活するということが条件になっている
からです。そしてその一年間の滞在の終わ
りに、そのことばで論文を書くのです。そし
て帰ってきて最後の一年でこんどは英語で卒
業論文を書き、はじめてA・B・が出る訳で
す。

日本でも、もし大学教育というものを国際
レベルにまで上げようとするならば、三年生
のときに、英語なら、アメリカでも、イギリ
スでも、カナダでも、オーストラリアでも行っ
て一年過ごして、英語で論文を書いた人がエ
アリア・スタディーのパチェラーがもらえ
る、そういうところまで行くのではないと、世
界的なレベルにはならないんだと、覚悟する
必要がありますね。

制度的改革について

近藤

そういう意味で、語学の教育が先生
のモラルや学生たちの心がまえということと
は別に、制度的にもっと思い切ったことがい
ろいろできるのではないか、国際主義で行く
のが一つの柱になっているとすれば、制度的
にもっと思い切ったことを——すぐできるか

できないかは別にして、最後に一言ずつうかがいたいと思います。

山路 あまりに大きな問題という感じはいまだにするんですけども、というのは、現時点で悪戦苦闘しているという感じがありませんから……。きょう出たお話でいろんな示唆をいただいた感じがするんです。卑近なことから申し上げますが、たとえばくが新しいシャンソンなんかをレコードで聞かせながら、歌詞をプリントしてやって、とにかくそれが覚えられたりしていく。これは英語だったらもっとやりやすいと思うのです。それこそサイモンやガーファンクルでも何でもいいですが、彼らには実際にそういう歌が生活の一部になっているのですから、それこそモチベーションにすぐつながってくる問題だと思えますけれども、そういうことを個人の段階では考えていながら、片方では外国語教育を向上させていくためのシステムの問題というか、学内体制といえますか、そういった問題があると思いますけれども……。

近藤 ここでは気楽に話せますから。(笑)

山路 ぼくは、あまり組織をいじったところで実は上がらないのじゃないかとさえ思う

訳です。いちばん基本的に言っておきたいのは、やはり国語とのつながりということなんです、伊藤先生もおっしゃったように、われわれ外国語の教師が日本語というものを扱って、なんとなくことばに対する畏敬の念が出てくるように思うのです。それがあってはじめて外国語の教育も成り立つ。畏敬の念は即ことばに対する愛情ということになりますから、それははつきりいつてわれわれ教師側の意識と覚悟の問題であることのほうが大きいんじゃないかと感じた訳です。たとえば源河先生がおっしゃった中学でのいろんな実験、ないしは実際にご自分で教科書を編纂されたり、ある意味では文部省の要綱まで無視する形で、たいへん努力をかさねておられると思うんですけども、その一方で敢えてこんなことをいうのは、なにか実りがある方向を模索しながら、はつきりいえば、組織上の改革を待つ前に、学生数とかカリキュラムの問題としてクラス内での現時点に即した改革を差し当たって積み重ねてゆくほうが、即効果があるという問題でもありませんし、それこそ百年の大計の一環として、よりよく機能してゆくのではないかと、考えている訳です。

それともう一つ、ことばに対する愛情ということですが、夢物語として言わせてもらいますと、言語というものは世界にどれだけたくさんあるか、「おはよう」でも「ありがとう」でもいいのですけれども、いろんな国のことばを全部録音して、学年の初めに、日本語だって英語だってそのうちの何千分の一なんだ、それを学ぶのにこれだけ苦労するということはどういう意味があるかという、こちらの姿勢というか、哲学の問題だと思っていますけれども、そういうことをやってみたい。

近藤 それはおもしろいな。

山路 われわれはあまりにも単一言語民族である訳で、それでいて外国語といえは一つの英語で、しかもその英語はVの音が全部ハヒフヘに点々が打たれるような国語教育のなかで若い人は生きてきている訳でしょう。外国語教育という見地からすれば、およそそういうことはナンセンスと思える。しかし、現実にはナンセンスであっても、だからこそ、それを意識させる必要が根本にあると思うのです。だから、そういう卑近なことくらいしか申し上げられませんが、総合科学部案とか、外国語学部、研究所あるいはセン

ターといったいろんな問題は、考えれば考えるほど、また幾多の委員会を経なければならぬ問題だと思えますから、いま述べません(笑)。ここ数年それで苦勞しておりますので……。

きょうお話を伺わしていただいて幸せだったと思うのは、自分の覚悟を相当きめなきゃならないということが一つ出てきたということです。源河先生がおっしゃったことなども、ぼくはあまりにも大学教育に密着した視点より意見を述べたわけですが、そのところは非常によくわかったつもりです。

中学校、高等学校の段階で非常に地道な同じフレーズの繰り返しをやったりしていくことというのは、基本的には極めていいじなことだと思っているんですよ。だから、そういうことの兼ね合わせというか、きょう先生方のおっしゃったことをアマルガム化してしまいうみたいで悪いんですけれども、もう少し同志社学内の一貫教育として、中学、高校の先生方、あるいは女子大とか大学とかがさまざまな局面からお話できる機会をもてたらと思います。

赤木 簡単に申し上げたいと思いますけれ

ども、私の体験から申しまして、外国語をうまくしゃべるということには、一つは国民性の問題があるのではないかと思います。私には中国の方とか、インドの方、アフリカの方と話し合いましたけれども、あの人たちは非常に積極的に話しますね。日本人はどっちかというとと英国人と似ておりまして、シャイとして、そう簡単にしゃべらない、そういう国民性があるような気がするんです。それなら中国の人はよく読み、書けるかというと、必ずしもそうでもない様ですしね。だから、あながち、日本人がうまくしゃべれないから日本の外国語教育はだめだとか、英語教育は世界の水準からすると低いとか、いうことがはたしていえるかどうか。日本人はどちらかと言うとししゃべる場合、非常によく考えて訥々とししゃべるのではないかと思うのですけれども、そのことがかえて相手にはよく理解されている場合もあるのではないかと思えます。ところが、他の外国人はワッと一気にしゃべっちゃう訳ですよ。そういう場合、相手の方としては案外聞き流してしまっているということもある様に感じました。

それから夢をいえばきりがありませんけれ

ども、私が今日持って来ました英国の新聞のスクラップを見えますと、この外国語教育の問題は、どうも日本だけの問題ではなくして、アメリカといわず、英国といわず、どの国でも学生の外国語学習に対する意欲が非常に低下している様です。アメリカの場合も、一九六三年以後、大学生がフォーリン・カルチュアを学ぶ興味をなくしている。とくに英国の大学の場合、それが一つの言語だけ、たとえばわれわれでいえば、英語とかフランス語とか、それだけを学ぶということに非常に抵抗を示している様です。それよりもむしろ、それを含んだ、ジョイント・コース、あるいはサンドイッチ・コースといっているのですが、つまりそのコースでは、外国語を履習しなければその科目がうまく理解できない様なコース、そういうコースへの希望者が非常にふえ、その数は七千名以上と書いております。そういうことから考えますと、同志社の場合でも、ただ単に英語だけとか、フランス語だけというのではなくて、何か別の科目と英語、フランス語、ドイツ語といったサンドイッチにした形でやれば、学生の方もモティーヴェーションがでてくるでしょうし、それ

に伴ってインタレストも出てくるでしょうから、より、やりやすくなるのではないかと思うのですけれども。

それと在外研究のことですが、できるだけ多くの外国語教師が在外研究出来るようになれば、現在の同志社の外国語教育にとって最も望ましいことだと思います。特に、中・高の先生方にそういう制度がないということはじつに残念なことだと思ふのです。

近藤 これはみなでバックアップしなければいけませんね。

赤木 今後そういうことがどんどんできるようにしていただければいいと思います。

今後の抱負

近藤 同志社をお出になった江崎博士が、このごろよくコンピュータ用語のハードウェアとソフトウェアの比喻をお使いになりますけれども、私も大学教師はソフトウェアで話をしていようで、中・高では、お話を伺っていて、やはり語学力のハードウェアを教育していただいているんだという気がしていますが、山路先生、赤木先生はよくできるものですから、そこを当然のことの

ように話しているんだけれども、中学校、高校の段階では、その当然のところを当然たらしめることに先生方が苦心なさっていると思う。つまり、語学のハードウェアですね。だから、問題がまたちよつとちがってくると思いますが、きょう、いろいろお話を伺って具体的によくわかったのですが、最後に、ここをこういふふうにしたなら、ということがありましたら……。

源河 中・高の教師は、その生徒の語学力といえますか、そのモチベーションその他のいろんな点での影響力を与えようと思うのです。その先生によって英語が好きになるか嫌になるか、あるいは具体的には発音が非常におかしくなるとか、いろいろな面が出てきますので、その点では非常に責任を感じます。ところが、現状は先に申し上げたように、非常に閉鎖的で、一貫教育とは名ばかり、なかなかその実が上がらない。しかしそうやって投げるのも残念な話ですので、まず私どもは、できることからやろうという訳です。幸い香里で具体的に先に述べたようなことをやっておりまです、それを一つの叩き台にして、いずれはその機運がほかの中・高へひろがっ

て行く、その場を提供するようにしたいと思うのです。

具体的には、去年から始めました教科書のBOOK I・IIができて、来年度はIIIができます。文部省の指導要領を無視はしておりませんけれども、大きく変えているんです。文部省では語彙の問題から文形の問題、それをどこで出すかということまで、こまかに規定しているんです。それでは私どものねらっている語学教育はできないという結論に達しまして、一応それをばらしまして、こちらで埋めるのにどうしたらいいかということで話し合っております。自主教材のいちばんの強みは、自分たちがつくった教科書ですので、使っていて問題が出たら、すぐ討議して次に改訂していく。昔でしたら、英会話はおれはあかんとか、おれは訳読だとか、そういう分野があったんですけれども、語学全体としてやろうという機運が出てきたことと、いろんな問題が討議されて、次はどう改めたらいいものになるかというプロセスにお互い参加して、そういうことから教師間の連帯意識をさらに強めていこうということなんです。それで私どもはいまの中二の生徒が高三になる

までには、BOOK IVまで作成する予定であります。これは夢でなくして現実に行ろう、事実やれるという見通しです。私どもは文法とかいわゆる知識として教えるのじゃなくて、また単調なパターン・プラクティスに終始することなく、ドリルの段階で、メカニカルな繰り返しからそれがだんだん意味をもち、そして自分の考えを発表し交換していくような、最少限度のユニットのあるドリルを構成していくという考え方なんです。そういうことから、もし中・高でそれがまとまっていけば、こんどは大学の実際の指導との間にギャップがあれば、それをどういうふうに埋めていくかという問題にもつながっていくと思います。

近藤 伊藤先生は、われわれとちがって、学校行政に重大な影響力をお持ちの先生ですから、ひとつトップから……。たとえば第二語学の分野をもっとひろげるとか、いろいろご高説をいつも拝聴しておりますけれども、改革に向けて最後にひとつ……。

伊藤 近藤先生が、ソフトウェアとハードウェアに分けて、大学ではソフトウェアを担当すべきだと……。

近藤 いや、べきではなくて、重点がそっちへ移っておりますので……。

伊藤 事実移っているだろうし、それでさえ時間が足りない、教師が足りない、学生が多すぎるという訳でしょう。ですから、やはりハードウェアは、逆に制度上ではつきり大学における語学教育の外に出すべきだという考えをもっております。

近藤 むこうの大学はたいていそうですね。

伊藤 チュリッヒの神学部の入学要綱を見ると、高等学校の段階で、ドイツ語とスイス語のほかに現代語が二つ、それからグリークとラテンが必須です。そしてヘブルを修得していることが望ましいという。それだけの条件をもった人でなければ神学部に入れないのです。だから、大学の一年からラテンもギリクも使って講義ができるという訳です。日本では、そこまでは期待できないし、ソフトウェアというのなら、ハードウェアで足りないところは大学の外にインスティテュートをつくってやるべきだ、そういうことを真剣に考えるべきときに来ているのではないかというのです。

近藤 旧制の大学はある面でそうだった訳ですね。

伊藤 ソフトウェアということについては、赤木先生がおっしゃったとおりだと思うんだけど、ジョイント・カリキュラムとかサンドイッチ・カリキュラムですか、文学をやるだけでなく、経済学でも、心理学でも社会学でも何でもいいのですから、そういうものを中心として読んでいけるということですね。そういう論文を書ける指導を将来していくべきだと思うけれども、そのことはけっして文学をないがしろにする訳ではない。ある程度ハードウェアを身につけるときでも、そういうものを使ってやるべきだと思いますから。ただし、ハードウェアが身につけてなくてソフトウェアを教えるというのは困る訳です。

さて、そういう言い方をしてしまったあとでは、近藤先生のご指示にこたえにくくなるんですけれども、そう言うもののハードウェアを専門にやってくれるインスティテュートはまだ外にできていないということから、次の議論が出てきます。実際問題としては、大学のなかである程度ハードウェアを

引き受けなければならない。英語ですと、高等学校までにハードウェアはある程度用意していただくことはできるけれども、いわゆる第二語学の類になると、いまはハードウェアを全部大学が引き受けている。いま同志社大学がオフアーしていることは独・仏・露・スペイン・中国の五カ国語ですね。ところが、たとえば朝鮮語を学ぶことの重要性はあきらかです。まっすぐに海を距てて日本をとりまいてる国のことは、同志社の語学教育に含まれていないのは朝鮮語だけですね。それでは韓国に対する従来からの蔑視がいまでも続いているんだと思われても仕方ないし、われわれはそういうところでもこまかい心づかいをすべきだと思うのです。ですから、国際主義などということをつたっている大学で、ほんとうからいえば、少なくとも十年前に卒先してやるべきだったので、いまこんなことを言うのは恥ずかしい、手おくれの状態だけれども、やはりできたらやってほしい。

近藤 百周年で例の国際係ですか、できたのですけれども、同志社の一つのテーゼとして、大学としては制度上あるいは予算面でも

それだけの考慮をして、そしてこちらから学ぶだけでなくて、お互いに平等に学ぶということがどうしても必要になってくると思いますね。ですから、韓国語を含めインドネシア語でありますとか……。

伊藤 マレー系のことばですね。

近藤 ドイツあたりですと、ガスト・アルバイターの力をからねばならんという経済的な事情もあるかもしれませんが、ベルシャ語をはじめ近隣のことは勉強しようと思えば全部できるようにありますね。そういう姿はそれこそうちよつと学ぶべきで……。

伊藤 おそらくドイツ人が韓国語を学んでいる率は、日本人が韓国語を学んでいる率よりも高いでしょう。というのは、ドイツで働いている看護婦さんだけで一万人ですよ。だから、いま韓国人の看護婦さんが朴さんによっていっぺんに帰国させられたら、ドイツでは閉鎖しなければならぬ病院がたくさんできる。

近藤 「ガスト・アルバイター」ということは一つみても、「外国人労働者」ということばを使わないで、「お客さまの労働者」というんですからね。やはりそういうところは

学ばなきゃならんということですか——どうも司会がまずくて申しわけございません。不手ぎわをおわび致します。ありがとうございます。
(一九七六年九月二十五日)

同志社時報 第58号

大学の入試制度を考える……………西尾 昭

〈座談会〉同志社の一貫教育

有賀のゆり・本宮 啓・高橋 勘

都岡 豁・大下 尚一・(司会) 小野 高治

同志社交響楽団の50年……………貞方 敏郎

時評・私の研究・その他

1部 150円・年3回発行